

博士学位論文審査要旨

2017年1月20日

論文題目： 国家統合におけるイスラーム教育の役割：タイ深南部を事例として

学位申請者： 西 直美

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 内藤 正典

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 中西 久枝

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 小山田 英治

要 旨：

西直美氏の学位請求論文『国家統合におけるイスラーム教育の役割：タイ深南部を事例として』に対して2017年1月18日午後4時40分から6時10分まで審査を行った。40分間の発表の後、質疑応答を実施した。

西氏の論文は、第1章「深南部問題の構成」、第2章「帰属意識の再生産の場としてのイスラーム教育」、第3章「学校教育と安全保障」、第4章「タイの南、マレーシアの北」、第5章「アイデンティティのスペクトル」と序章、終章の7章から構成されている。

西氏の論文は、タイ南部、特に深南部とよばれるパッターニ、ヤラー、ナラティワート、サトゥン、ソクラーの各県で2004年以降に激化した政府軍との衝突、住民を巻き込んでのテロなどの暴力が多発した所謂「深南部問題」を扱っている。地域紛争の研究には、武装闘争の歴史的展開を追うものや闘争を率いるイデオロギスト達の言説研究、さらには地域格差や経済、社会構造を取り上げるなど多様な方法と領域が存在する。

西氏は、「国民形成の教育政策が、深南部のマレー系ムスリムを疎外してきた」という言説に注目する。紛争が2004年以降、すなわちタクシン政権下で激化したため、タクシン政権の政策に注目する研究は多いが、西氏は、1921年の義務教育法の適用によって深南部地域のマレー系ムスリムの伝統的イスラーム教育への介入が始まって以来、国民統合教育とイスラーム教育の分断が深化した点に注目して本論文を構成した。マレー・ナショナリズムに基づく、分離独立運動とそれに対する中央政府の弾圧として描かれる深南部問題を宗教教育の伝統と国家の教育政策から論じた点は、既存の深南部地域研究に新たな知見を与えるものとして高く評価できる。

第2章において、深南部において古い歴史を持ち、ポーノと呼ばれる教育機関を通じてなされてきたサーイ・カオ（伝統派）のイスラーム教育が、マレー・ナショナリズムを涵養し再生産する役割を担ってきた過程が詳述される。そのうえで、1990年代からサーイ・マイ（イスラーム改革派）の浸透によって、タイ政府の教育政策が新たな局面を迎えたことを指摘する。第3章では、タイ政府が長年にわたって脅威と断定してきたマレー・ムスリムの伝統的イスラーム教育（サーイ・カオ）に対して、サウジアラビアに留学していたイスラーム指導者を中心とするサーイ・マイ（改革派）を利用することで、新たなイスラーム教育を導入し、マレー・ナショナリズムと分かち難く結びついていた伝統的イスラーム教育とは異なる選択肢が提供されたことを明らかにする。

西氏の論文の核心をなすのはこの部分である。サウジアラビアから持ち込まれるイスラーム思想はサラフィズム（他称ではワッハーブ主義）であり、今日、急進的で過激なイスラーム主義の基底をなす思想潮流として多くの国で危険視されている。しかしながら、タイの場合、サラフィ主

義に立つイスラーム教育を導入することで、逆に、タイからの分離独立を掲げるマレー・ムスリムのイスラームを切り崩す試みがなされたというのである。サーイ・マイ（サラフィ主義）から見れば、マレーの文化的・社会的歴史の中で育まれたサーイ・カオ（伝統主義）は、夾雑物にまみれた不純なものとして批判される。シリアやイラクで猛威を振るった「イスラーム国」が、各地に根付いていた伝統的イスラームを背教として攻撃したのと構造的には同じである。

しかし、タイでは政府がサラフィ主義を取り込むことによって、マレー・ナショナリズムの基盤を成す伝統的イスラームを批判するという極めて特異な政策が採られ、それが学校教育の場を通じて実現されたのである。サーイ・マイ自身は国策として発生したものではなく、1980年代以降のイスラーム世界に共通のイスラーム復興運動の一形態だが、それがタイという国家においては国民統合のための学校教育制度に組み込まれていくことを明らかにした点は、本論文の特筆すべき点と言える。反面、サーイ・カオからみれば、サーイ・マイはイスラームの原点に回帰するという純化運動ではあっても、千年以上にわたって土地の文化や制度の中に根付いてきた歴史性を一顧だにしないという点で、外的で異質なものとして排除される。したがって、サラフィ主義の導入が深南部問題の解決に寄与するというものはなく、新たな争点を生み出すことになる。本論文は、イスラーム教育の学校教育制度に注目しながらタイの国家統合政策を論じ、タイ研究のみならず、同様にサラフィ主義のイスラーム思想が拡大している東南アジア、南アジアなどの諸地域の紛争研究にも新たな研究視角を提供する可能性をもつものとして高く評価できる。

他方、論文の構成上、冒頭の章に深南部問題の個別具体的な内容を厚く記述したため、後半の章になるにつれて視界が開けるように問題の全体像が浮かび上がる。論文の構成上、やや重心のかけ方に問題があるとの指摘が審査員からなされた。

以上の諸点を勘案し、本論文は博士（グローバル社会研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2017年1月20日

論文題目： 国家統合におけるイスラーム教育の役割：タイ深南部を事例として

学位申請者： 西 直美

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 内藤 正典

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 中西 久枝

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 小山田 英治

要 旨：

西直美氏より提出された学位請求論文『国家統合におけるイスラーム教育の役割：タイ深南部を事例として』に対する総合試験を1月18日午後4時40分から6時10分まで実施した。

専門分野の政治学、タイ地域研究、並びに本論文に即した研究内容について提出された論文をもとに40分間の発表ののち、50分にわたって審査員から口頭で質疑を行い、西氏はいずれに対しても的確に答えた。

語学試験（英語、タイ語）についても十分な能力をもつものと判定された。

よって総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 「国家統合におけるイスラーム教育の役割：タイ深南部を事例として」
氏名： 西 直美

要 旨：

タイ南部国境県（以下深南部）は、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県、サトゥン県、ソクラー県から構成されている。パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県の3県は、北部マレーシア方言（以下パタニ・マレー語）を母語とするマレー系のムスリムが8割を占めている。

深南部では、2004年1月4日にナラティワート県の軍基地から大量の銃器が略奪される事件が起こってから、タイ政府と反政府武装組織との間での抗争が激化している。現在のタイ深南部に当たる地域には、かつて「メッカのベランダ」と呼ばれ、東南アジアにおけるイスラーム教育の中心地として知られていたパタニ王国が存在した。周辺諸国が植民地化されていく中、1909年のタイとイギリスとの間で結ばれた領土確定条約によって深南部は仏教国タイの領土に組み込まれた。タイ政府は、教育と開発政策を通じてマレームスリムの同化・統合を試みてきた。タイの同化・統合政策に反発する様々な分離独立派組織の勃興と衰退を経て、1990年代後半にはタイ政府はマレームスリムの統合に成功し、深南部問題はもはや過去のものであるとみなされていた。

先行研究では、深南部問題をタイによる同化・統合政策の歴史として取り上げる傾向がある。深南部の教育について論じた研究では、タイ政府の教育政策に関する研究、深南部の伝統的教育機関がマレームスリムのアイデンティティの再生産に果たしている役割に関する研究の二つに大別できる。いずれの研究動向においても、深南部問題をタイ政府による教育政策の結果から生じた問題として捉える傾向がある。また、タイ政府の深南部地域におけるガバナンスの観点から「なぜマレームスリムは同化・統合されないのか」という統治側の論理か、「なぜマレームスリムは闘い続けているのか」というマイノリティ側の論理で深南部問題を論じる構図が従来の研究では主流となってきた。

深南部問題が、タイ政府による同化・統合政策の結果であることは確かである。マレームスリムが「仏教徒タイ人と自分たちは異なる」という感覚を強く持つのも明らかである。しかし、深南部問題の歴史において現在の状況が特異なのは、分離独立主義に基づくとされる暴力の犠牲者の多くに、マレームスリム市民が占めるようになってきている事実である。2004年以降激化した暴力の応酬は、タイ政府の失策によるのか、マレームスリムの強靱な帰属意識によるのか、それともイスラームという宗教によるのか、これまでのタイ仏教とマレーイスラームといった枠組みでは説明できない点も増えてきている。タイ政府のマレームスリムに対する同化・統合政策は2004年前後では基本的に変化していない。政府による失策が契機であったとしても、マレームスリム社会で生じている何らかの変容が、深南部問題の性質変化の根本原因である可能性がある。

本研究の目的は、タイにおけるイスラーム教育の分析を通して、深南部マレームスリム社会の変容の実態を明らかにし、タイの国家統合におけるイスラーム教育の位置づけ、役割とメカニズムを解き明かすことである。深南部問題の背景要因の一つとしての教育に着目し、文献調査とインタビュー調査を併せることで、ムスリムコミュニティ内部の多様性を論じる。タイの深南部問題を教育の観点から見た場合、タイ政府は深南部のムスリム人口を排除しようとして来たというよりは、包摂を試みて来たことも明らかである。2004年の紛争の激化と性質変化の背景について、過激派と政府の対立といった治安問題としての側面を強調するのみでは不十分である。

本研究では、タイ政府によって脅威とみなされてきたイスラーム教育であるが、イスラーム教

育は結果的にマレームスリムのタイへの国民統合を推進したのではないか、という仮説の下で、タイ政府のイスラーム教育政策を分析すると共に、以下の3点の問題意識を念頭に議論を進めていく。①ナショナリズムに対して否定的なサーイ・マイ（イスラーム改革派）の深南部における動向をどのように評価するか、②マレー・ナショナリズムの要素が強いとされる深南部において、人々のタイ政府の教育政策に対する認識はどのようなものなのか、③2004年以降の紛争の激化はどのような変化を及ぼしているのか、である。

第一章では、深南部問題を理解する際の鍵となる概念について、近年の紛争の性質変化、聖典主義イスラームと民衆イスラーム、タイと深南部の関係史、タイの政治構造の特徴に分けて考察した。第一章の考察に基づいて、第二章では、教育とナショナリズム、宗教、深南部研究から自らの研究を位置づけた。教育は近代国家の基盤であり、国民教育は国家形成と軌を一にするものであった。タイでは、近代国家の形成過程において、仏教寺院を中心に仏教理念に基づく教育の導入が行われた。先行研究では、こうした事実から、タイの同化・統合政策が深南部のマレームスリムを周縁化し、阻害してきた様子を描き出している。しかし、公立学校におけるイスラーム教育が公式的に認められ、ムスリムとして宗教を实践する権利が認められている現在において、暴力の応酬が泥沼化している背景を考察する必要がある。そこで、タイ政府がマレームスリムの同化・統合を目的に行ってきた国民教育のみならず、タイ政府側とマレームスリム側の双方が実施してきたイスラーム教育に着目する。教育とは、帰属意識を日々生産する場でもある。イスラーム教育がマレームスリムの統合に果たす役割・メカニズムを考察することで、本研究の目的であるマレームスリム社会変容の実態を明らかにすることが可能となる。

第三章では、タイにおけるイスラーム教育政策を歴史的観点から検討した。タイ政府は1909年に深南部を行政上統合した後に、常に上からの抑圧を行ってきたという訳ではなく、マレームスリムのタイ社会への包摂を試みて来た。タイ政府の政策に積極的に応じるマレームスリムの動きが存在したことは明らかである。現在では、私立学校のみならず公立学校でもイスラーム教育が認められるようになってきている。第四章以降では、深南部マレームスリム社会について、現地調査のデータを中心に検討を行った。一枚岩的に論じられがちな深南部であるが、地域によって歴史的背景も、地理的環境も異なる。第四章では、深南部の特徴を示した上で、調査地であるナラティワート県ルソ郡を選択した理由を提示した。また、本研究でキーワードとなるサーイ・マイ（イスラーム改革派）とサーイ・カオ（伝統派）の現地調査における判定基準を明らかにし、インタビュー調査の詳細、問題点と解決方法を明示する。

ルソ郡は、深南部において最も強力であるとされる分離独立派組織であるBRN（Barisan Revolusi Nasional、民族革命戦線）の影響力が強く、人々のマレームスリムとしての帰属意識が強い地域として知られる。第五章では現地地で実施した教育関係者に対するインタビューを、イスラーム教育と帰属意識、サーイ・マイとサーイ・カオ、2つの母語、イスラームを学ぶということ、紛争が教育に及ぼした影響という、5つのテーマ毎に再構成しながら描く。サーイ・マイ（イスラーム改革派）とサーイ・カオ（伝統派）を2つの極として便宜的に設定することで、人々の帰属意識の多様性をスペクトル上の分布として理解することを試みた。

深南部では、公立学校、私立学校、伝統的教育機関において、イスラーム教育が実施されている。タイ政府がイスラーム伝統的教育機関に対して否定的であったことは否定できないものの、深南部におけるイスラーム教育が抱える問題は、学校教育制度内でイスラーム教育を行う事に伴う問題とも密接に関わりあっている。タイのイスラーム教育の展開は、深南部がタイの植民地的な位置付けにあった事実と、イスラーム教育自体の近代化という2つの問題が絡み合っている点で複雑である。

1990年代以降マレームスリム社会で影響力を伸ばしているサーイ・マイは、マレー・ナショナリズムから距離を置く傾向がある。タイ語を用いることにも抵抗が少なく、イスラームに関する知識をタイ語で得ているという特徴も存在する。一方で、伝統教育機関が置かれた社会的状況は、

それほど変わっていない。興味深い現象としては、村落部の伝統的教育機関においてもサーイ・マイの影響がみられたことである。一般的に、村落レベルでサーイ・マイの影響はかなり限定される、もしくは無いとみなされてきた。少ないことは確かであるが、村落レベルの伝統的な教育機関において、当人が認めるか否かはともかく、サーイ・マイに近い考えを持つ教育関係者が存在することが明らかになった。

タイの学校教育が普及しておらず、人々の社会経済的地位が比較的画一的であった時代と比較して、深南部におけるムスリムコミュニティは多様化しているといえよう。一方でタイ政府に対するジハードを主張する者がいれば、他方では完全にタイ・ムスリムとして生きる道を選んだ者もいる。タイ人とは異なっている、という感覚を共有しつつも、選ぶ生き方は多様化している。分離独立主義者に代表される人々は、抑圧的な政府と蔓延する汚職、正義が確保されていない状況下で、タイ政府に対して武器を持って戦う道を選んだ。サーイ・マイの人々は、マレームスリムの地位の向上という点において、タイ社会に溶け込む道を選んだ。タイでは、サーイ・マイと呼ばれる人々は、タイ国家への参入を進めることによって、自らの権利を実現するという方向で動いてきたといえる。こうした意味において、イスラーム改革派によるイスラーム教育制度の改革・発展は、マレームスリムのタイへの国家統合を進めてきた。ただ、統合が進んでいるという事実は決して、マレームスリムの中でタイ人とは異なる、他者である、という感覚を減少させていることを意味しない点に留意する必要がある、今後の動向を注視していく必要がある。